

感謝と賛美

詩篇 100:1-5

みなさんは最近どのようなことで感謝されたでしょうか？ 詩篇には神への感謝を歌ったものがたくさんありますが、「感謝の賛歌」というタイトルがついているのは、この詩篇だけです。毎週の礼拝はこの100篇1, 2節を読んでいただいて始まります。この詩篇は神への感謝を教えています、何を神に感謝するよう教えているのでしょうか。この詩篇には三つの感謝すべきことが書かれています。

その第一は、神との関係です。つまり神様と私達はつながっているということです。英語で礼拝のことをサービスと言いますがサービスというのは仕えるということですね。ですから「喜びをもって主に仕えよ」とは「喜びをもって主を礼拝せよ」ということです。礼拝は、クリスチャンの義務です。義務という押し付けられることと思う人がいますがそうではなくそれがなされて当然のこと、クリスチャンの最大の特徴とも言うべきことという意味です。その上で礼拝は決して重苦しい義務ではなく、喜びの義務なのです。いやいやながら、ぼそぼそするのは本当の礼拝ではありません。私たちは喜びの声をあげて神を礼拝するのです。しかし、喜びの声をあげるというのは、賑やかな音楽で景気づけることとは違います。礼拝は、たんに自分を慰めたり、元気づけたりする儀式ではないのです。礼拝は、私たちの感情に訴えるだけのものでもありません。聖書が「知れ。主こそ神。」(3節)と言っているように、礼拝は、私たちに知性を求めます。知性と言っても、それは、たんなる頭脳の知識ではありません。人格と人格のまじわりの中で神を知ることが礼拝なのです。詩篇 46:10「やめよ。知れ。わたしこそ神。」は以前の口語訳では「静まって、わたしこそ神であることを知れ。」と言っていますが私たちが心に深い慰めを受け、身も心も強められるのは、礼拝で神を知ることによってなのです。

第二は、神のご臨在です。それは神は実際、おられるという体験です。

4節は「感謝しつつ、主の門に、賛美しつつ、その大庭に、はいれ。主に感謝し、御名をほめたたえよ。」と言って、礼拝をささげる人たちの姿を描いています。神を礼拝する人々は、神殿の門をくぐり、神殿の庭に入ります。では、それからどこに向かうのでしょうか。祭壇です。祭壇は、そこで犠牲をささげ罪の赦しを願うところです。神は心からの悔い改めをもって祈る者に罪の赦しと平安と和解を与えてくださいます。祭壇は、罪の赦し、神との平和、そしてなによりも、神の臨在の象徴です。人々は祭壇に近づき、神の臨在に触れ、神への感謝が最高潮に達するのです。祭壇が無ければ神殿の門がどんなに立派であっても、神殿の庭がどんなに美しくても、神殿に行く意味がありません。

新約時代の祭壇は、聖餐のテーブルです。旧約時代に祭壇で捧げられていた動物の犠牲は、主イエスが神の子羊となって十字架の上でご自分をささげられることを予告するものでした。イエスの十字架の後には、どんな動物の犠牲も必要ありません。新約の時代には、パンとブドウ酒をささげて、主イエスの十字架の犠牲が表わされています。聖餐を定められたとき、イエスは弟子たちにパンを与え「これはわたしのからだである。」と言われ、ブドウ酒を与え「これはわたしの血である。」と言われました。私たちは聖餐式でパンと杯を目で見、手で触れ、そしてこの舌で味わいます。そのように、私たちが目で見、手で触れ、味わうことができるほどに近く、主イエスは私たちとともにいてくださるのです。聖餐式についてはよく聖餐式に出るとか、この日にしようとか私たちの側で計画し、実行しているように捉えてしまいがちですがそうではありません。私達の都合で存在したり、存在しなかったりするものではないのです。聖餐は主イエスがなしてくださった十字架の贖いのみわざに感謝し、主イエスのほうから、「これはわたしのからだである。」「これはわたしの血である。」と言って、ご自分を私たちに差し出し、私たちに触れてくださっています。その時に、私たちも、私たちの信仰を差し出すとき、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」(マタイ 28:20) という約束が実現し、私たちは主の臨在に触れることができるのです。クリスチャンでも神がおられるということをもっと明らかに示して欲しいという方がおられます。祈りがもっと聞かれたら神様を認めますという人もいます。しかし、私たちが神のご臨在を覚える鍵となるのは私たちの神への近づき方によります。言い換えると私たちの礼拝や聖餐式にどの

ように加わろうとしているのかにかかっています。礼拝する私たちが門をくぐり、庭に入り、そして向かうところは主の臨在です。そして、そこから、わたしたちひとりびとりに、また教会全体に大きな感謝が湧き上がるのです。

詩篇 100 篇が感謝するように教えている第三のことは、神のご性質です。もし、神がただ真実なお方、全知全能の支配者、正義の審判者であるだけなら、「知れ。主こそ神。」と言われても、そのような神を知ることが恐ろしいだけです。裁かれっぱなしです。そうすると聖く完全に正しい神の臨在が恐怖になってしまい、神に近づくことができなくなります。しかしまた神は、いつくしみ深いお方、恵み深いお方であるからといって何をしても赦されることになるなら、罪深いのは自分ではないと責任転嫁したり依存的な人間になってしまいます。神は恵み深く、また真実なお方でもあります。神は悪をお裁きになりますが、心から悔い改める者を赦してくださるお方です。罪を憎まれますが、救いを求める罪人をあわれんでくださるお方です。神はどんな汚れからも離れたきよいお方ですが、きよめられたいと願う者には、本人がどんなに汚れていようと手を差し伸ばしてくださるお方なのです。「恵みとまことはイエス・キリストによって実現した」ヨハネ 1:17 とあるように神の聖さと正しさを保ち、同時に悔い改め求める者には全き罪の赦しを与えることができるのは主イエス・キリストをおいて他にはありません。

イエス・キリストは私のどんな小さな罪であっても、「それは神の前に罪です」「あなたは罪を犯しています」と指摘されるお方ですが、同時に「その罪を認め、悔い改める者に赦しを与えてくださるお方です。」イエス・キリストの十字架の死によって赦されない罪は何一つないのです。私は高校2年生の秋に近所の大学生の人に声をかけてもらって教会の高校生の集会に出席しました。その教会の牧師先生はいつも20分弱聖書の話をして隣の自分の家に戻られるのですが新約聖書のローマ人への手紙から話をされました。ですから私が聖書で一番最初に読んだのはローマ人への手紙です。この書には最初から人間の罪が出てきますので本としては固い感じがしますが結構、興味が湧きました。多感な時期でしたから罪びとである人間の醜い姿がよく理解できました。親や大人に対する不信感、同世代の人間に対する不信感、社会の矛盾にたいする怒り、など本当に世の中に対して批判的な自分にとって聖書の言う通りだと思いました。ただ一つの重要なことに気づきませんでした。それは自分の罪ということです。自分の中にある醜く罪深い姿になかなか気づきませんでした。人を批判したり、皮肉を言ったりする時に何か自分は正しいところにいるような思いでいるけれども神の目から見るとそんなことを言ったり思ったりするあなたはどうなのでしょう？ イエス様が「あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分自身の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか」ルカ 6:41 とおっしゃった通りです。そのようなことを自問自答する中で恵みと真実（まこと）どちらも完全に持たれたイエス・キリストを知り、信じるようになりました。自分の罪を認め、その罪の代価をイエス・キリストが十字架の上で死んでくださった。そのことを信じた時に思わず涙が止めどもなく流れ出た時のことを昨日のことに思い返します。その涙が意味することは何でしょうか？ それは、私が最も求めていたことは私自身が神によって赦されるという体験であったということです。それからというもの人を赦すということがあまり負担にならなくなったように思います。

私はバプテスマを受けて50年以上になりますが、ふりかえって見ると、私の人生のすべてが神のいつくしみ、恵み、そして真実で成り立っていることが分かります。そして何より素晴らしいことは、この神の真実が変わらないことです。世の中のものすべて変わります。人間の愛もいつかは冷えていきます。私自身も神にたいしていつどんなときも真実であったかというところではありませんでした。しかし、神の私への真実は変わりませんでした。「二千年前のイエスの十字架が、今の私たちにとってどんな意味があるのですか。」という質問をよく耳にします。私はその質問にこう答えたいのです。「神の愛は、二千年たとうが、三千年たとうが、変わることはありません。神は人間を十字架の愛で二千年間も愛し続けてくださっているのです。今、その愛を受け入れてください。」と。祈ります。